

# 郷土研通信

九十九里郷土研究会

## 翔べ一球

小澤君代



その影の力となつて朝三時に起き、弁当作り、本人は四時に起き、グラウンド集合五時という日々が続く。じじ、ばばはいつも父や母が健康で温かく、時には厳しく援護する姿に合掌する気持ちでいっぱいです。数え切れない程の賞状とトロフィーが飾られていない室には、不撓不屈と刻まれたグローブと桃太郎旗がある。それは二〇一四年十二月二十七日から三十日の四日間、プロ野球八十周年の二球団とジュニアトナメントが九州福岡ヤフオクドームで開催。飛行機で到着。千葉ロッテから選ばれし

「ワァーイ！ワァーイ！」の歓声は今も耳から離れず、一人ひとりの笑顔と熱い涙が表出され、これがスポーツで味わう甘い歓喜なかと再三再四感じた。孫男児二人は野球が大好きで、兄弟は幼稚園から軟球をさすつたり、香いたり、擦つては投げ、擦つては投げるまねをしたりしていた。豊海マリナーズのチームに入り、友達と練習を重ねる日々だった。地元野球の試合は数えきれない程の戦いをし、勝ったり、時には涙することも多く、風の強い日などは砂埃が汗ビツシヨリの顔にあたり、真黒になつてピッチャーをしている姿は頼もしかった。その影の力となつて朝三時に起き、弁当作り、本人は四時に起き、グラウンド集合五時という日々が続く。じじ、ばばはいつも父や母が健康で温かく、時には厳しく援護する姿に合掌する気持ちでいっぱいです。数え切れない程の賞状とトロフィーが飾られていない室には、不撓不屈と刻まれたグローブと桃太郎旗がある。それは二〇一四年十二月二十七日から三十日の四日間、プロ野球八十周年の二球団とジュニアトナメントが九州福岡ヤフオクドームで開催。飛行機で到着。千葉ロッテから選ばれし

ユニアたちの最高峰、それまでには小学生高学年、夏休み三・四回、ロッテ球場でのテストがあり、各地区のグループから選ばれた四百名の中から、九十九里JR（ジュニア）オアシヤンから二人選出、最初三十九名の中に入り、続いてのテストで十八名の中に入り、大驚きと奇跡かなと家族中、当の弟本人も驚く有様でした。それからというものは毎週土・日曜日はロッテ球場に練習に行き、感奮と驚異的な日々が続いた。背番号六、シヨルトに決定し、ヤフオクドームに飛んでいった。グループレッの監督やコーチも近隣のチームからも今まで選出されたことがなかったと大喜び。試合は楽しかったと、今でも時々VTRを見ては笑みを浮かべている。すべて用具や宿泊、飛行機代はロッテから贈呈された。今までの試合も地区予選で優勝し、県大会に出場。二〇一二年五月二十七日市原市臨海球場、二〇一三年十月十一日養老川第一球場、翌年六月九日養老川臨海球場、同年六月一日高円宮賜杯、全日本学童軟式野球千葉県大会には背番号一で出場、選手宣誓、八月三日は県少年野球大会、千葉日報杯争奪戦は県営天台野球場、日本ハム旗関東軟式野球大会、少年野球パラマウントカップで最優秀選手賞、エアーフロント杯では最優秀打撃賞と、数々の努力の賜と思う。現在、佐倉シニアに入部。平日も週二回、土・日曜日と頑張っている。とここで、祖父母として時折、話し合いをしていきます。このグローバル経済の中、趣味を生かして、楽しんでおります。人様の話しに耳を傾けるよう努力しているつもりなのに、どうしてか、気付けていると、自分の世界に入っている。言葉数を少なくして、フット入る必要が、心柄にさせることが必要。親しい方々に優しい心柄にさせるよう、自我を軽減させる必要。宇宙の節理の中に無我となり、人の心を和らげ、印象を残す努力、オバマ大統領の広島への折鶴にも匹敵する程の気持ち、旨いとか、美味しいというより、感動の渦に巻き

|             |                        |
|-------------|------------------------|
| 第3号         |                        |
| 会長          | 内山いつ                   |
| 事務局長        | 村松英一                   |
| 事務所         | 町生 651<br>九中 1<br>九田 7 |
| 電話          | 76-0081                |
| 会員数         | 57名                    |
| 平成28年4月1日現在 |                        |
| 設立          | 平成22年<br>4月17日         |

## 隠れた町の史跡(3) 豊海地区不動堂境内の常夜灯



大銀杏があり、その古さを示しています。朱色のお堂正面の両側には古色を帯びた「常夜灯」が二基建立されています。刻字は比較的鮮明で判読が出来ます。右側の表には、「奉納常夜灯」とあり、左側は一文政七甲申歳九月吉日、「上総国不動堂村施主佐久間覚兵衛勝成」とあります。西暦一八二四年晩秋の十一月、不動堂脇（現豊海小学校）に屋敷を持つ大地曳網主佐久間覚兵衛の音頭で、近隣の村人の寄付を仰いでこの常夜灯が建立されたことが分かります。右側の基壇には四面に寄付の村人名が刻されています。その氏名は「真亀郵金右衛門、当村（不動堂村）若者中、真亀村釜持商人中、片貝村北新田作次郎、西野郵佐兵衛、三郎兵衛、粟生村商人中……」です。記/齊藤 功

豊海地区の豊海小学校の側を流れる真亀川河川不動態の常夜灯が、お堂の境内にあり、お堂の境内には

込まれるバランスのある発言、今日も明日も続く毎日毎日一生懸命生かされてもらっている感じが、拍車をかけた、心柄という美しい言葉があります。昔はこのよう美しい言葉を日常使っていたことでしょうか。いつの間にか聞かなくなりました。心に柄がある。この模様は、その人の言葉や行動の鏡のようなものです。自分の心にどんな模様があるか、眺めてみましょう。幸いなことに心模様は一度描いたら消えないというものではないです。自分で気づいた時、描き直せばいいと思いません。孫たちの翔んでいく球を追いつながら

九月十七日実施「史跡探訪」記録

学ぶ所が多かった一日

内山 菊敏

ここ半月、台風の影響か、雨が降ったり、止んだり、日の目を見られない日が続いている。九月の第三土曜日に計画していた史跡探訪に参加した。皆さんの心掛けが良かったのか、朝から好天に恵まれた。参加者三十名程にて町バスを利用しての北総方面の史跡巡りである。栄町の「県立房総のむら」を始め、龍角寺、滑河観音、下総歴史民俗資料館、小御門神社等を回って見て来ました。最初に寄った所は「房総のむら」で、広大な敷地に江戸時代後期から明治時代初期に於ける商家十六棟で、町並を再現してあった。当時の日常生活や、人々が町場で賑わう景観が一目瞭然である。また、少し進んで行くと、大きな古民家があった。聞くとところによると、大網白里市の名主クラスの秋葉家の屋敷を再建したという。四、五百坪はあるのか、入口には長屋門があり、中央には母屋、井戸、馬小屋、物置小屋等が建てられている。建物すべてが茅葺屋根で、江戸時代末期の生活様式を再現している。私は、この母屋



を見て非常に興味を引かれた。と、間口十間、奥行五間程の大きな建物、築後百六十一年、取りまて、我が家から見て、あるからで、口を三たの、と、土間、奥の、入間、奥の、力を入れた、奥の、据え、付、子

供の頃を思い浮かべながら見学した。煮炊きは毎日、「カマド」を使うので、一年間の燃料を確保するのが容易ではなかった。母が農作業の合間に松林に枯松葉を掃き集め、リヤカーに積み、後押(あとお)しをしながら帰って来た。そんな遠い昔の光景が懐かしく思い出された。ところが、昭和四十年、町営ガスが一般家庭に供給される様になり、炊飯器、レンジ等が画期的に普及し始め、不必要になったカマドも必然的に取り壊されていった。 「房総のむら」の見学を終え、安食の「八郎治食堂」での昼食である。役員の計らいで、安くて美味しい昼食が食べられた。午後からは、小御門神社等、神社仏閣を見て回り、まさに「見て、聞いて、確かめて!」、本当に学ぶ所が多い一日であった。

楽しい、有意義な研修視察

谷川 良枝

九月十七日、久しぶりの良いお天気、私達「郷土研究会」一行二十八名は、町バスで北総方面に日帰り研修視察に行つて参りました。内山会長のバスの中での朝の御挨拶は「見て、聞いて、確かめる」でしたので、その言葉を目標に、最初に訪れた所は栄町にある「房総のむら」でした。日本初のポスト・それは黒いポストで、驚きました。江戸時代の町並み、武家の住まい、民家などを見て廻つてみると、何となくその時代に生活していた人々の暮らしが少し分かるような気が致しまして。ここで私は偶然に十数年ぶりに旧友とお会いでき、嬉しかったです。 頭部に祀られている龍角寺(国の文化財)の薬師如来を見るのが出来ませんでした。今日所々に咲いている彼岸花が私達を歓迎してくれているようで、心が癒されました。昼食は、そば懐石処の八郎治でいただきました。普段より多く歩いた後のお食事は、格別美味しかったです。 次に訪れた所は、平安時代より続く寺院で、龍正院滑河観音で、茅葺きの立派な山門や夫婦松が見事でした。ぼけ防止道祖神の前では女性の皆さん、どのお寺より念入りに手を合わせていたように見受けられました(笑)。下用品などが多く展示されていて、「あつ、これ

新会員の声 町の歴史を知りたくて!

石井 清士

今春入会させて戴き、『会誌』が多岐に及び、内容と執筆者の熱い想い入れの記事に圧倒されました。仕事を終え、房総半島を一年掛けて廻り、移住先を九十九里町としました。 今回、最初の投稿ということで、私の生まれ故郷を聞いて下されば幸いです。日本海に面した北海道増毛町に終戦二年前に生まれ、四歳までおりました。鮮明に残っている風景は二シンの漁です。春先、浜辺が活気づき、町総出で沖合に仕掛けた囲み網を男衆が浜に引く時、父に連れられて砂浜に座つて眺めていました。映画好きで、高倉健さんのファンの方は「駅ステーション」が、増毛町の駅前前の倍賞千恵子さん扮する居酒屋「犯人を追つて来た刑事役の高倉健さん」の会話がテレビから紅白歌合戦で八代亜紀「舟唄」が流れる場面、昭和五十四年です。 旭川で過ごし、七年前、当地に来た次第です。二シンのとイワシの違いこそあれ、海のある町に来たんだと思う今日この頃です。最後になりましたが、入会を勧めて頂いた山田氏、入会手続きの際に丁寧な説明を頂いた村松氏に感謝申し上げます。郷土史のことを少しづつ身に付けばと思っております。よろしくお願いたします。

# 梁川星巖夫妻、九十九里へ

川島 秀臣

粟生の大綱主であった飯高家（通称粟生の隠居）の膨大な古文書類は、町の文化財に指定されている。その中に次のような書簡がある。

貴家へ御訪申さず早春より御待下され候由（よし）、何共申訳これ無く真平（まつびら）御許容下され度（たく）候、玉岡老人の咄（はなし）にて承知仕（つかまつ）り候処、御地辺は鑑定家沢山に出来候由、大慶此事に候、定（さだめ）て貴君も御上達と察し奉（たてまつ）り候、陳（のぶ）れば此梁川星巖（やながわせいがん）と申し詩書画山水出来候人也、此度上総東金、九十九里遊歴仕り候、貴家へも添書仕り候、何卒（なにとぞ）御周施下され度、四天木其外然（しか）るべき方も候は、頼み上奉り候（中略）  
三月十日  
俊二（ママ）郎様  
徴（花押）

四天木にても近々御出府御噂（うわさ）これ有候間、其節御同伴御出府待ち奉り候  
書簡の送り主は高久（たかく）霧厓（あいがい、名は徴）、受取人は粟生隠居五代目俊次郎（号、霞邸、かきゆう）である。霧厓は書画も巧で、一方では各地の愛好家に書画を斡旋する商人でもあった。飯高家との付き合いの深さが伺える書面である。

梁川星巖は、江戸神田に玉池吟社を組織し、多くの詩人と交友し、また、後進を育成し、高名であった。妻の景（号、紅蘭）を伴い房総遊歴したのは天保十二年（一八四一）春から夏のことであった。星巖五十三歳、紅蘭三十八歳。霧厓らの紹介の下に房総各地の豪商農、網主らを訪問、滞留しつつ、数ヶ月の旅を続けたのであった。

この近辺では東金（河野家）、片貝（古川家、城ノ内）、粟生（飯高家、隠居）、四天木（斎藤家、四郎右衛門）へ滞留したという。書簡にあるように滞在先では周辺の愛好家を集め、詩作を指導したり、夫妻の書画を販売したりしながら旅を続けたのであろう。  
房総遊歴の終点が曾我野村（千葉市蘇我町）の小河原家であった。小河原家は廻船問屋とし

# 不動堂新田の一本松と石碑

平成十三年四月に西ノ下の中井あさ氏（故人、川島俊江さんの母）は大正末期の不動堂新田の様子を記した書簡を齊藤功氏に送った。その書簡は地域を知る史料として貴重であることから、本会報にその一部を掲載することにした。（編集）

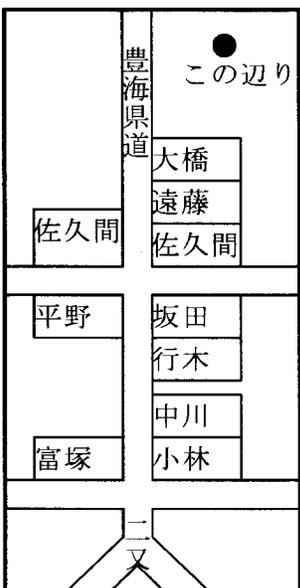
私は大正五年に不動堂新田で生まれまして。戸数十戸の小さな集落でした。電気も昭和二十二年につくようになりまして。故に終戦のご詔勅も聞かれませんでした。小学校三年生（大正十四年）の時、かつよい一本松の中に友達と一緒に入ってゆきました。松露は出ているし、そうめん茸は出ているし、かつよい松の木には山ぶどうの木がからんで、ぶどうも食べ頃になっていました。「それを食べるとうも食べません」と男の子におどかされたので、食べませんでしたけど、「何で」と言う不思議が起こったので、母親に聞きましたら、「あそ

て知られ、粟生飯高家とも濃い姻戚関係にある家である。霞邸の母も、妻も小河原家から粟生に嫁いで来たのである。多分、宿泊は霞邸の周旋であらう。ここより江戸までは小河原家の船を利用したものと思われる。  
京都を終った夫妻は、弘化三年（一八四六）、旅を終り、梅田雲浜、吉田松陰、頼三樹三郎ら詩人・志士との交流を深め、次第に尊王攘夷運動にのめり込む。  
先頃、東京の古書市で星巖と紅蘭の漢詩幅を見かけ、入手した。星巖の七言絶句は、この時期の作であらう。公然と幕政を批判している。

多造砲車調火薬 用兵休講旧機関  
一声霹靂（へきれき）千軍潰  
是正珍奇也等閑（またなおざり）  
やがて井伊直弼による「安政の大獄」に巻き込まれ、捕われる寸前の安政五年（一八五八）九月、当時流行していたコレラに罹り急死した。人は「さすが詩（死）上手」と擲筆されたという。紅蘭も捕らえられたが、「星巖遺稿」を編集し、その菩提を弔った。尚夫妻の房総遊歴については鶴岡節雄氏による『総文人散歩』（多田屋刊）に詳述されている。

これは大昔に津波で流された人の墓だ」と言うことでした。それからは、あまりそこには行かなくなりまして。  
松の木は、一本だけ四方に手を延ばして十m以上の高さであるし、根元は小高くなつていて、木の脇に石碑が建っている。書いてある字はまだ読めなかった。その地は、免田であり、集落の人達が小松山の下草を毎年刈り取っていました。私も十九歳で東京に出て、ふるさとのことは考えませんでした。戦争が激しくなつて、昭和二十年三月九日から十日の大空襲で焼け出され、故郷にもどつて参りました。そして、現在地に落ち着きました。昭和五十二年頃から古川力先生に依つて郷土史研究会が発足し、会員にして頂き、史跡をめぐり歩いていくうち、不動堂新田の地に建っている一本松と石碑のことが分かりました。元禄十六年（一七〇三）十一月二十三日（旧暦）の地震と大津波によつて流されて死んだ人、牛、馬などをひとまとめに埋めてある場所と言ふことです。

その碑がいつの日か、消えてなくなつて、宅地造成されているので、集落の人（故佐久間重雄さん）に聞いてみました。「あの木は、戦時中に兵隊さんが松根油をとつたので枯れてしまったので、切り倒して、石は後ろの竹藪の中に置いてある」との話でした。早速、行って見ましたら、笹竹の中に西向きに置いてあり、誰があげたのか、湯呑茶碗にお茶らしきものが入つておりました。今は宅地造成になつていので、空地になつております。史跡は史跡として、きちんと後世に残すことに意義があると思つております。



この不動堂の「元禄津波供養塔」（不動堂三六五番地）は平成二十四年二月一日に町指定文化財に登録された。所有者は不動堂丘自治区と不動堂納屋自治区。

上総国分尼寺見學記

染谷佳子



<復元された上総国分尼寺>

住む私たちが古くから伝わる文化が早くから開かれた地域である。時代（今から千二百年前）、聖武天皇の命により、日本全国に国分寺が建てられた。総国分寺は市原に建てられた。市原に上総の国分寺が七ツトで建てられるようになり、我が上総国分寺の規模は、広大で、全国二番目にあり、寺域は十三町歩を占める。金堂、講堂、南大門、中門、回廊、七重堂が発掘調査で確認されている。今でも礎礎跡などがよく分かる。さらに、瓦窯跡二ヶ所もあつたことが分かつており、全体が国の史跡として指定されている。

さて、国分尼寺もすぐ近くにあり、これは全一を誇り、広大な敷地に市原市は総力を挙げて復元に取り組み、中門と回廊は復元され、発掘の跡地に、忠実に当時と同じ大きさで、建築方法も古代技術に倣い、塗料も昔通りの材料を使つており、奈良から有名な宮大工を招き、その指導下で建てられ、朱色はベンガラ、緑色は緑青、白壁は貝を砕いたものに海藻を混ぜたもので、瓦は奈良で焼いたものであり、まさに「天平の都」が蘇つた様である。

資料館で説明を聴き、スライドで千二百年前の国分尼寺の全体像を見せて貰い、カーテンを開けると、彼方に復元された回廊が現れる。古組になつて、学芸員の熱心な説明に、古

上総の国司であつた大伴家持や菅原孝標なども、この地に住んだのである。「更科日記」の作者も、父菅原孝標とともに、この地に住んだことを思うと、感懐、ひとしおである。

国分寺の近隣にあつたことは確かである。またこの辺りは、古墳時代も栄えていた。有名な「王賜鉄剣」の出土した稲荷台古墳も近い。皆さん、千二百年前の「天平文化」を是非、どうぞ！

「作田川さくら会」の活動

望月操

作田川の九十九里橋と港の間に「真忠組」と「竹久夢二」の碑があり、昨年まで竹藪を背にしたそれらの碑は、通り過ぎてもうほど目立たないものでした。竹藪が刈られると、今度はみすぼらしさが目に付くようになりまし。

昨年十二月、町長さんとの話し合いの中で、竹垣が作られ、今年の二月、町長さん、町職員の方、そして、「作田川さくら会」のメンバーで草刈りの合同作業が行われました。

「作田川さくら会」は、平成二十二年に作田川の九十九里橋からなおよし橋までをきれいにしよう、と草刈り、ゴミ拾いを始めたのを機に出来たボランティアグループです（二十三年四月、県NPO団体「九十九里町作田川さくら会」登録）。

当初、中程にある花壇は蔓に覆われ、上につき出した枝に僅かに桜が咲いていました。蔓を払い、下の土が見えると、まるで木々の呼吸が聞えるようでした。木々の処分などは、県土木事務所・町と相談しながら少しずつきれいになっていきました。

現在、毎月第一土曜日に定例会をしています。ですが、仕事を持つている人もいることから、個人で出来る時に出来ることもしています。ある人は桜の毛虫取りを、ある人は毎日ゴミ拾いを、ある人は草花植えをというように。

先日五月七日の定例会で声をかけてくれたのは、引越してきた方でした。公園のベンチで家族会議を開き、きれいな公園があることから、ここに決めたというのです。ボランティアの作業と知つたその方は、家に戻り、熊手を待つてきて、一緒に汗を流してくださいました。他にも、釣りに来て、この公園を気に入りました。

奥様に見せたくなり連れて来たという大網の方、きれいなので、つい来てしまったといわれた東金のご夫妻など、とても嬉しく、私たちがボランティアの励みになっていきます。釣り人も、今では殆んどの方がゴミを持ち帰っていきま。常連さんが、初めて来た人にお手本を示しているそうです。また、川辺では、見知らぬ人でも、挨拶を交わしています。これも安心・安全の意味でも、嬉しいことの一つです。

「さくら会」の紹介を、と言われて書き始めた文ですが、郷土を大切に思う気持ちは共通していると気がきました。

「小関ナヤから『九十九里町をきれいに』を発信しようよ。」

「あちらこちらでボランティア活動が起こつて『ピカピカ九十九里町』になるといいね。」

メンバーの高齢化の問題はさて置いて、元気な楽しい会話が弾んでいます。



「あ」とがき

本会報も第3号の発行となった。内容的には小澤さんの随筆、染谷さんの旅行記、望月さんの地域活動の紹介、川島さんの研究論文など、多彩なものになっている。

雑誌などは3号までは容易に発行するが、以降は姿を消すことが多いという（いわゆる「3号雑誌」という）。そして、4号が発行できると、当分は継続されるともいわれる。本会報は来年度4月に第4号の発行を予定しており、当分、発行できると思う。他方、来年度は1年をかけて「伊和志」第2号を交刊しようとの声もある。

さて、本会も機動的に飛び回る内山会長となつて会員数も増え、計画された事業も一つ一つが充実した内容で終えている。次の課題は？町内外の人々を集客化できる歴史的資源の発掘か？第2のいわし博物館の開館か？（本保）